和泉式部日記の「をかし」をめぐって

前橋　均

はじめに

日本の古典文学作品に用いられている語彙を計数的に分析し、個個の作品の特質を探ろうとする試みは、各作品の総索引が相次いで刊行されるようになってから、新しい研究分野として盛んに行われているようである。大野晋氏は、古典文学作品に於ける品詞別（名詞・動詞・形容詞・形容動詞）異なり語彙数を調査され、その結果、作品のジャンルによってその比率に特徴ある偏りが存在する、という興味深い事実を指摘しておられる。(1)

『和泉式部日記』に関しても、同様の方法による研究は既に行われている。安藝直子氏は、大野氏の分類基準に従って『和泉式部日記』の品詞別異なり語彙数を算出し、作品中に用いられている形容詞の比率が他の古典文学作品に比べて極めて高い数値を示していることを指摘された。(2) この事実は、『和泉式部日記』が描写や叙述に精細を極めた作品であることを物語っている。安藝氏は更に、作品中の形容詞の「表現主体」と、それが現れる文の種類について計数的に分析した結果、「表現主体」が「女」である用例が数値的に最も多く、しかもそれが地の文に最も多く現れる、という事実を見出された。そして、この事実から、作者の眼は作品世界を「物語として客観的に描きつつ、いつか我知らずその認識をはなれてできごとを主観的に日記している」とされ、作者と「女」との視点の重なりを指摘しておられる。安藝氏による形容詞の研究は、真に興味深いものである。感情・情緒の表出を担う形容詞の研究は、作品の内容や特質をより深く理解する上で重要視しなければならないものであろう。

しかし、形容詞について研究していく際に、単にその使用量を計数的に分析するだけで、作品の特質を十分に捉え得るとは考えられない。安藝氏が指摘された、作者と「女」の視点の重なりについても、その根拠を数値に求めるだけでは不十分と思われる。

そもそも、「語り手」が語り出した表現のひとつひとつは、みな「語り手」の心を通して発せられたものなのである。それ故、語り出された語句の表現形態そのものの特徴を捉えてこそ、「語り手」の心を知ることができるのではないだろうか。

本稿では、作品中に現れる形容詞の表現形態そのものに着目し、

個々の用例が地の文に於いてどのような現れ方をしているかを詳細に分析・検討しながら、『和泉式部日記』[3]の「語り手」の性格を明らかにしていきたいと思う。

一

『和泉式部日記』中の地の文に現れる形容詞の中から、まず、情意性形容詞である「をかし」に着目し、それがどのような現れ方をしているのかを見ていく。

例①[4]まへ近き透垣のもとに、をかしげなるまゆみのすこしもみぢたるをおらせ給ひて、高欄にをしかゝらせたまひて

〈宮〉ことの葉ふかくなりにけるかな

とのたまはすれば

〈女〉白露のはかなくをくと見しほどに

と聞えさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。

右の引用本文の形容詞「をかし」は、趣深い付句を詠んだ女に対しての宮からの批評、すなわち、宮の心中表現と考えられるものである。この「をかし」は、「と」という格助詞で受け、「おぼす」という動詞に続けられて地の文になる。つまり、心中思惟叙述の基本的文章形式になっているわけである。これと同様に、表現主体が宮にあると考えられる「をかし」は、他に二例見出し得る。

例②〈宮〉「今のまいかゞ」との給せたれば、御返

〈女〉けさのまに今は消ぬらん夢ばかりぬると見えつるたまくらの袖

と聞えたり。「わすれじ」と言ひつるを、をかしとおぼして

例③〈宮〉「おぼつかなくなりにければ、参り来てと思ひつるを、人ぐ〜文つくるめれば」とのたまはせたれば

〈女〉いとまなみ君来まさずは我ゆかんふみつくるらん道を知らばや

をかしとおぼして

この二例も、やはり心中思惟叙述の基本的文章形式になっていることがわかる。

それでは、表現主体が女にあると考えられる「をかし」は、一体どのような現れ方をしているのだろうか。

例④宮より「雨のつれ〴〵はいかに」とて

〈宮〉おほかたにさみだるゝとやおもふらん君恋ひわたるけふのながめを

とあれば、おりを過ぐし給はぬををかしとおもふ。

右の形容詞「をかし」は、季節の情趣を見過さずに歌を贈ってきた宮に対しての女からの批評、すなわち女の心中表現と考えられるものである。この「をかし」は、「と」という格助詞で受け、「おもふ」という動詞に続けられている。つまり、前述の宮の心中表現の場合と同様に、心中思惟叙述の基本的文章形式になっている。このようなものは、他に二例見出し得る。

例⑤賜ふとて〈宮〉「かゝること、ゆめ人に言ふな。すきがましきやうなり」とて入らせたまひぬ。〈童がこの手紙を〉もて来たれば、をかしと見れど、つねはとて御返聞えさせず。

例⑥〈女〉「なをいとをかしうもおはしけるかな、いかで、いとあやしきものに聞しめしたるを、きこしめしなをされにしがな」と思ふ。

ところが、女側からその心中を表現した「をかし」の中には、心

中思惟叙述の基本的文章形式になっていないと考えられるものが見られる。それらは、次の十例である。

［A］

例⑦御をくりに上達部かずをつくしてゐ給(ひ)て、御あそびあり。いとをかしきにもつれ〴〵なりしふる里まづ思(ひ)いでらる。

例⑧〈宮〉「いかにぞ。月は見たまふや」とて

〈宮〉わがごとくおもひは出づや山のはの月にかけつゝ嘆く心

を

れいよりもをかしきうちに、宮にて月の明かゝりしに人や見けんと思ひ出でらるゝほどなりければ

［B］

例⑨女はまだ端に月ながめてゐたるほどに人の入り来れば、すだれうちおろしてゐたれば、れいのたびごとに目馴れてもあらぬ御すがたにて、御なをしなどのいたうなへたるしもをかしう見ゆ。

例⑩見れば、たゞかくぞ

〈宮〉おもひきや七夕つめに身をなしてあまのかはらをながむ

べしとは

とあり。さはいへど、すごし給はざめるはと思(ふ)も、をかしうて……

例⑪〈宮〉関越えてけふぞ問ふとや人は知るおもひたえせぬ心づか

ひを

いつか出でさせ給(ふ)」とあり。近うてだにいとおぼつかなくなし給(ふ)に、かくわざとたずねたまへる、をかしうて……

例⑫猶おりふしはすぐしたまはずかし、げにあはれなりつる空のけしきを見給ひけると思(ふ)にをかしうて、この手習のやうに書きゐたるを、やがてひきむすびて奉まつる。

例⑬この童の「いみじうさいなみつる」と言ふがをかしうて、端に

〈女〉霜のうへにあさひさすめり今ははやうちとけにたる気色

見せなん

いみじうわび侍(る)なり」とあり。

例⑭〈宮〉かれはてて我よりほかに問ふ人もあらしのかぜをいかゞ

聞くらん

思いやりきこゆるこそいみじけれ」とぞある。のたまわせけると見るもをかしくて。

※［C］

例⑮格子をあげながらありつれば、たゞひとり端にふしても、いかにせましと、人わらへにやあらんと、さま〴〵におもひみだれてふしたるほどに御文あり。

〈宮〉露むすぶ道のまに〴〵あさぼらけぬれてぞ来つる手枕の

袖

この袖の事は、はかなきことなれど、おぼし忘れでのたまふもをかし。

例⑯もてゆきて、〈童〉「まだこれより聞えさせ給はざりけるさきにめしけるを、今まで参らずとてさいなむ」とて御文取り出でたり。〈宮〉「よべの月はいみじかりし物かな」とて

〈宮〉ねぬる夜の月は見るやとけさはしもおきゐてまてど問ふ

人もなし

げに、かれよりまづの給ひけるなめりと見るもをかし。

右の用例で、例⑦は女から事物（管絃の遊び）に対しての批評であり、それ以外の九例はすべて女から宮に対しての批評と考えられ

る。これらの「をかし」を見ると、いずれも「と」という格助詞では受けていない。それぞれの表現形態を見てみよう。［A］群の二例はいずれも連体形である。［B］群についてはどうか。例⑨は連用形で「見ゆ」という動詞に続けられている。なお、この例についての詳しい説明は後述するので、ここではひとまず保留する。例⑩から⑭までの五例はいずれも連用形で「て」という接続助詞に続けられている。中でも例⑭は、接続助詞「て」で終止する形になっている。又、［C］群の二例は、終止形で言い切られたままになっている。

このように、以上の十例は、いずれも心中思惟叙述の文章形式ではなく地の文の叙述形式になっている。こうした現れ方は、宮から女に対して評した場合には一切見られなかった特徴的現象なのである。

二

前節で引いた例のうち特に注目されるのは、地の文において形容詞「をかし」が終止形で言い切る形になっている⑮・⑯（※印）の二例である。この地の文に於ける形容詞終止形の言い切りという現象に着目し、『和泉式部日記』中に現れる「をかし」以外の情意性形容詞について見てみると、次の五例を見出し得る。

例ⓐあやしき御車にておはしまいて、〈宮〉「かくなむ」と言はせたまへれば、女いとびなき心ちすれど「なし」と聞えさすべきにもあらず。昼も御かへり聞えさせつれば、ありながら帰したてまつらんもなさけなかるべし、ものばかり聞えんと思(ひ)て、西のつま戸に円座さし出でて入れたてまつるに、世の人の言へばにやあらん、なべての御さまにはあらずなまめかし。

例ⓑ物もの給はでたゞ御あふぎに文ををきて〈宮〉「御つかひの取らで参りにければ」とてさし出でさせ給へり。女もの聞えんにもほど遠くてびむなければ、あふぎをさし出でて取りつ。宮ものぼりなむとおぼしたり。せんざいのをかしきなかに歩かせ給(ひ)て、〈宮〉「人は草葉の露なれや」などの給(ふ)。いとなまめかし。

例ⓒまへ近き透垣のもとに、をかしげなるまゆみのすこしもみぢたるをおらせ給ひて、高欄にをしかゝらせたまひて

〈宮〉ことの葉ふかくなりにけるかな

とのたまはすれば

〈女〉白露のはかなくをくと見しほどに

と聞えさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。宮の御さまいとめでたし。御直衣に、えならぬ御衣、出だし袿にしたまへる、あらまほしう見ゆ。目さへあだ〳〵しきにやとまでおぼゆ。

例ⓓ御かへり

〈女〉世のつねのこととともさらにおもほえずはじめてものを思ふあしたは

と聞えても、あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりの給はせしものをとかなしくて、おもひみだるゝほどにれいの童来たり。御文やあらんと思(ふ)ほどに、さもあらぬを心うしとおもふほども、すき〴〵しや。

例ⓔ[5]これも心づかひせられて、もの聞ゆるほどに月さし出でぬ。いとあかし。〈宮〉「ふるめかしうおくまりたる身なれば、かゝる

ところに慣らはぬを、いとはしたなき心ちするに、そのおはするところへすへたまへ。よも、さきぐ〳〵み給(ふ)らん、人のやうにはあらじ」とのたまへば

右の五例の形容詞を見ると、例ⓐ・ⓑの「なまめかし」と例ⓒの「めでたし」は、いずれも宮の容姿・様子に対しての女からの批評と考えられ、例ⓓの「すきぐ〳〵し」は、宮に心引かれ溺れていく女の自己反省と考えられる。又、例ⓔについては、「いとあかし」の一文を地の文と考える説と、そこからを次の宮の言葉（会話文）に含めて考える説とが対立している。[6] 会話文説の主たる根拠は、月の明るさを女の部屋に入る口実にするために宮が「いとあかし」という巧みな言葉を発したのだ、というものである。しかし、遠藤嘉基氏が説いておられるように、「「いとあかし」を口実とするようでは、宮の人がらに、奥ゆきがなくなるし、文のあじわいも、白々しいものとなる」[7]と思う。前文に「これも心づかひせられて」とあるから、女のみならず宮も、初めての訪れ故に、女に対して自然な心遣いをしているはずである。それ故、「いとあかし」は、宮の切り出しの一文としてはあまりに強い調子であると思われる。こうした直接的で強引な宮の態度は、この場面には不似合なのではないか。やはり、「いとあかし」は地の文と見るのが穏当であろう。しかも、この一文は単に月の有様を説明したものではなく、鈴木一雄氏が指摘しておられるように、「初のお目通りで、月の明るさがひとしお心にかかる」[8]女の感情が込められたものと考えられるのである。このように、例ⓐからⓔまでの形容詞言い切りの用例は、いずれも女の心中表現と考えられるものと言い得る。

以上のことから、『和泉式部日記』中の地の文に現れる情意性形容詞終止形の言い切りの用例は、七例ともすべて「女」の心中表現と考え得るものであることがわかった。逆に、宮や他の人物の心中表現と考え得る用例は一例も見出し得なかったのである。「女」が宮を批評したり自己反省したりするときに現れるこうした特徴的現象は、この作品を考える上で一体如何なる意味を持つのであろうか。以下、考察を進めていきたい。

三

情意性形容詞の表現性について、先学の研究にあたってみよう。小山敦子氏は、現代日本語の助詞である「の」「が」「は」とそれに続く述部との構文分析をされる際に、その前提になる諸事実の一つとして、次のような原則を指摘しておられる。[9]

感情形容詞（本稿が言うところの情意性形容詞）は、連体修飾語として他者を修飾する時に他者の感情内容も表わすことができる。それ以外は、述部の言い切りの形としては話者の感情内容しか現わさない。従って、他者の感情内容を現わす時は、語幹に「――がる」を付して動詞化するか、「――のだ」をあとにつけて形式的に連体修飾語化する。（傍線筆者）

この原則によれば、例えば「私は悲しい。」とは言えても、「彼は悲しい。」とは言えないことになる。「彼」を主語にするならば、「彼は悲しがる。」とするか、「彼は悲しいのだ。」としなければならない、というのである。このように、小山氏の説によれば、現代語に於いては、情意性形容詞の言い切りの形で第三者の感情を表わすことができない、という「感じ手の人称制限」[10]の原則が成立することになる。

上野英二氏は、『源氏物語』の語り手の感情表出について考察していく際に、『源氏物語』の地の文に作中人物の感情が表出される情意性形容詞終止形の言い切りが多く現れる、という事実に着目しておられる。[11] これについて、氏は、「それは結局、語手が作中人物の描写をしているうちに、いつのまにかその心情に同化して、その内面を語ることをする」のであって、「一見その原則（小山氏が指摘された「感じ手の人称制限」の原則）をはずれるかに見えた諸例も、単に、話者、語手が作中の三人称者になり代わっただけのこと」で、『源氏物語』に於いても「感じ手の人称制限」の原則は守られていたのだ、と説いておられるのである。氏は又、様々な作中人物の感情が表出されている用例を挙げ、「『源氏物語』では、（語り手の作中人物への）感情移入が自在に（傍点筆者）行われ」る、と述べておられる。すなわち、『源氏物語』では、情意性形容詞終止形の言い切りによって表出される感情の主体は、主人公たる「光源氏」に限られるものではないわけである。

又、清水好子氏も、こうした『源氏物語』の語り手の特徴について、上野氏に先んじて指摘しておられる。[12] 例えば、賢木の巻で、光源氏が野々宮に居る六条御息所を訪れた場面、[13]

〈源氏〉「こなたは、簀の子ばかりの許されやは侍りや」とて、〈簀子に〉のぼり給へり。花やかにさし出でたる夕月夜に、〈源氏の〉うちふるまひ給へるさま・匂ひ、似る物なく、めでたし。

ここに現れる「めでたし」の言い切りについて、氏は、六条御息所の思いとも考えられるとして、次のように述べておられる。

この時、作者は、「……にほひ似るものなくめでたし」と書いて、「……めでたしと思しぬ」などとは書かなかった。つまり、光源氏に身近に仕え、その言動を仰ぎ見る古女房が、光源氏の行動を述べ、その心中の思いをこうもあろうと語るのではなくて、彼女たちの批評感想の言葉と同じ形で、御息所の心の声をさし出した。そのために、「……にほひ似るものなくめでたし」という言葉は語り手の女房の声と同じ強さ、生気を持って迫ってくる。作中人物は、一定の、つねに固定した視点から叙述されるのではなく、彼らはじかに声をあげ、溜息を吐きかけることを可能にしたといえよう。（中略）作者は、第三者として作中人物について述べながら、いつでも容易に当事者――作中人物そのものになり変わって声をあげることができる。

ここで指摘された「めでたし」の言い切りの例も、又、「感じ手の人称制限」の原則を逸脱するものではなかった。ここでも、『源氏物語』の語り手が作中人物に心情的に同化する現象が指摘されている。前出の上野氏は、このような考察を、『源氏物語』全体にわたって論証されたわけである。

四

再び『和泉式部日記』中の情意性形容詞の問題に戻って考えてみよう。前節で地の文に現れる情意性形容詞終止形の言い切りの用例を七例挙げたが、そのうち何例かをここで改めて採り上げ、その表現内容を詳細に検討してみたいと思う。

例えば、例⑮の「をかし」の場合はどうか。

例⑮格子をあげながらありつれば、たゞひとり端にふしても、いかにせましと、人わらへにやあらんと、さまゞ〳〵におもひみだれてふしたるほどに御文あり。

〈宮〉露むすぶ道のまに〳〵あさぼらけぬれてぞ来つる手枕の袖

この袖の事は、はかなきことなれど、おぼし忘れでのたまふもをかし。（前引）

この場面で、女は、「手枕の袖」が詠み入れられている宮からの後朝の文を受取る。「手枕の袖」とは、十月十日頃の来訪の際に宮が詠んだ一首が発端となり、その後の二人の贈答に、互いの愛を確かめ合うかのように詠み入れられてきた歌詞のことである。女は、この「手枕の袖」の戯れを「はかなきこと」と思いながらも、忘れず詠み入れてくる宮の態度に対して言い知れぬ喜びを感じている。この「をかし」には、女の沸き上がる喜び・感動が込められているのである。

しかし、語られた場（地の文）に表出される感情は、本来、「語り手」のものでなければならないはずである。この「をかし」を、前節で述べた「感じ手の人称制限」の原則に当てはめて考えてみるとどうなるであろうか。『和泉式部日記』の「語り手」は、自らの感情を表出する語り方をすることによって「女」の感情の表出に代えた、と考えられるのではないか。すなわち、「語り手」は、言い知れぬ喜びを感じている「女」に心情的に同化し、自らの喜びを語るように「女」の内面を語り出していることになるのではないだろうか。

他の用例についても見てみよう。例ⓓの「すきゞ〳〵し」の場合はどうか。

例ⓓ御かへり

〈女〉世のつねのこととともさらにおもほえずはじめてものを思ふあしたは

と聞えても、あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりの給はせしものをとかなしくて、おもひみだるゝほどにれいの童来たり。御文やあらんと思(ふ)はどに、さもあらぬを心うしとおもふほども、すきゞ〳〵しや。（前引）

この場面には、後朝の思い乱れた女心の悲しみが描かれている。「すきゞ〳〵し」は、藤岡忠美氏が指摘しておられるように、女が「現在の自分の気持の動きを見つめ、反省する言葉」と解するのが適切であろう。[14] 女は、一方では故宮を思い起こして反省しながら、他方では宮にどんどん引きつけられてしまう。こうした心の乱れを自ら省みて、「すきゞ〳〵し」と反省し思い嘆くのである。この場面に於いて、『和泉式部日記』の「語り手」は、宮に対する募る思いに心乱れ、自戒の念に苛まれる「女」と、心情的に同化し、自らの嘆きを語るように「女」の内面を語り出していることになるだろう。

更に、例ⓒの「めでたし」の場合はどうか。

例ⓒまへ近き透垣のもとに、をかしげなるまゆみのすこしもみぢたるをおらせ給ひて、高欄にをしかゝらせたまひて

〈宮〉ことの葉ふかくなりにけるかな

とのたまはすれば

〈女〉白露のはかなくをくと見しほどに

と聞えさるさま、なさけなからずをかしとおぼす。宮の御さまいとめでたし。御直衣に、えならぬ御衣、出だし袿にしたまへる、あらまほしう見ゆ。目さへあだ〳〵しきにやとまでおぼゆ。（前引）

ここは、情趣の中に陶酔する二人が、恋の過程を述懐し合うような

連歌を互いに交わし、共感を求め合う場面である。深い心で宮と結び付いているという愛の確信のためか、宮を見つめる女の眼には、我が眼を疑うほどに「めでた」き宮の姿が映るのである。この場面でも、「語り手」は、愛の喜びに浸る「女」の心と一体化して「女」の視点から宮を評する、といった語り方をしていることになる。

他の四例を検討しても、いずれも同様に、「語り手」が「女」と心情的に同化していることが指摘できる。すなわち、『和泉式部日記』に於ける情意性形容詞終止形の言い切りという現象は、小山氏が指摘された「感じ手の人称制限」の原則に基づいて考える限り、『和泉式部日記』の「語り手」が、「女」に感情移入しその内面を語ることはあっても、逆に、宮や他の人物に感情移入することはない、という語りの特質を有しているということを意味していたのである。

五

ここで、終止形の言い切り以外の形容詞の現れ方についても、いくつか採り上げて検討してみよう。果たして、他の現れ方についても、前述の事実と同様のことが指摘し得るのであろうか。

まず、第二節で挙げた例⑭「をかしくて。」について見てみる。この「をかし」は、前述の通り連用形で接続助詞「て」に続く形になっている。しかも、⑩から⑬までの例と異なり、以下の文へ続くことなく接続助詞「て」で終止し言い切られる、という特徴的文章形式になっているのである。これは一種の省略法と考えられ、ここには深い余情・感動が込められるはずである。こうした現象にも、「語り手」の感情表出は認められるのではないか。このようなものは、他に二例見出し得る。

○かくて、二日ばかりありて、夕暮ににはかに御車をひき入れておりさせ給へば、まだ見えたてまつらねば、いとはづかしう思へどせんかたなく。なにとなき事などの給はせて帰らせ給(ひ)ぬ。

○〈宮〉人はいさわれは忘れずほどふれど秋の夕暮ありしあふこと

とあり。あはれにはかなく、たのむべくもなきかやうのはかなし事に、世のなかをなぐさめてあるも、うちおもへばあさましう。

この二例は、いずれも連用形で終止し言い切られており、述語動詞が省略された形になっている。すなわち、「語り手」が余韻を残して言いさした形になっているわけである。しかもこの二例は、例⑭と同様、「女」の心中表現と考え得るものである。こうした現象からも、「語り手」は、やはり「女」に心情的に同化していると言えよう。

又、前節で説明を保留した例⑨「をかしう見ゆ。」についても、ここで検討してみる。この「をかし」は、被修飾語である述語動詞「見ゆ」の内容を表わしている。「見ゆ」は、女の心意作用を表わす動詞である。⑨の例は、基本的ではないが、女の心中思惟叙述として扱うことができよう。しかし、これは述語動詞が自動詞である点、④から⑥までの例とは質を異にする。「思ふ」・「見る」という他動詞に比べて、自発的意味を含む「おぼゆ」・「見ゆ」などの自動詞は、より主観的な思考判断を表わしているのではないか。すなわち、「見ゆ」には、「語り手」自身の思考判断がわずかながら表出し

ていると考えられるのではないだろうか。このようなものは、他に三例見出し得る。

○宮の御さまいとめでたし。御直衣に、えならぬ御衣、出だし袿にしたまへる、あらまほしう見ゆ。

○宮より御文あり。見れば、〈宮〉「さりともとたのみけるがをこなる」など、おほくのことどもの給はせで〈宮〉「いさしらず」とばかりあるに、むねうちつぶれて、あさましうおぼゆ。

○としかへりて正月一日、院の拝礼に、殿ばらかずをつくして参り給へり。宮もおはしますを見まいらすれば、いとわかううつくしげにて、おほくの人にすぐれ給へり。これにつけても我(が)身はづかしうおぼゆ。

この三例は、例⑨同様、いずれも「女」の心中表現と考え得る。こうした現象も、又、「語り手」が心情的に「女」に近いことのあらわれと考えられるのではないか。

以上の用例は、いずれも形容詞終止形の言い切り現象に準ずる扱いをしてもよいだろう。

更に、次のような例もある。

例(A)御返し〈女〉「いでや

〈女〉冬の夜の目さへこほりにとぢられてあかしがたきを明かしつるかな

など言ふ程に、れいのつれ〴〵なぐさめてすぐすぞいとはかなきや。

この例は、「ぞ+(いと)形容詞連体形」の係り結びで言い切られた表現に、間投助詞「や」が添えられた形になっている。これは、形態こそ異なるが、形容詞終止形の言い切りよりもむしろ強い感情が表出される表現と言えよう。すなわち、「語り手」の感情がより強く表出される表現形態と考えられるのである。このようなものは、更にもう一例ある。

例(B)上の御方の女房ゐでいて物見るに、まづそれをば見で、「この人を見ん」とあなを開けさはぐぞいとさまあしきや。

例(A)の「はかなし」は、「女」の自省の気持を表わすものと考え得るが、例(B)の「さまあし」は、「語り手」が第三者的立場から客観的に批評したもの、すなわち草子地的なものと考えざるを得ない。しばしば「女」と心情的に一体化する『和泉式部日記』の「語り手」も、時として、例(B)のように、作中場面を離れた第三者的立場から作中世界に対して批評・感想の言葉を漏らすこともある。しかし、逆に、宮や他の人物の心情に同化して語る例は、やはり一切見られなかったのである。

本節で採り上げた用例は、いずれも、『和泉式部日記』の「語り手」が「女」に感情移入するという前節までの指摘の補強になるものであろう。

結び

以上の考察から、『和泉式部日記』の「語り手」は、「女」と心情的に同化し、「女」の眼と心を通して作品世界を語っていることがわかった。しかし、前述の通り、『源氏物語』では、語り手が特定の作中人物にだけ感情移入することはない。すなわち、『和泉式部日記』の「語り手」は、『源氏物語』の語り手とは明らかに異なる姿勢で作品世界を語っているのである。『和泉式部日記』には、「女」に限らず、宮、北の方など幾人かの人物が登場する。しかし、この

形容詞の言い切りという現象に着目する限り、「語り手」は、それぞれの作中人物を常に等しい距離を保ちつつ語っているのではない。「語り手」は、しばしば女の心情に接近し、一体化する。それは、「女」が、宮に対する募る思いに心を痛め、宮からの愛に心ときめき、共に語らう喜びにうち震える――そんな時に起こる現象なのである。地の文に於いて客観的叙述を保ちきれず、しばしば「女」の心の奥に入りこみ、その内面感情を吐露する『和泉式部日記』の「語り手」は、心理的に極めて「女」に近い位置にいると言えよう。

こうした語りの特質から考えてみると、本稿で想定した「語り手」なるものを「作者」と重ねて考えるならば、実に理解し易いように思われる。現在主流となりつつある自作説[15]の立場をとる諸氏のほとんども、こうした内部徴証に、その論拠を求めておられる。しかし、主人公に対する思い入れが非常に深い第三者の作であるならばこの程度の叙述はあり得るだろう、という反論も認めざるを得ない。平田喜信氏は、『和泉式部続集』の日次詠歌群の方法の延長上に『和泉式部日記』を位置づけておられるが[16]、そうした外部からの考証と本稿の内部考証との接点が見出し得たとき、初めて「作者」についての論及が可能になるに相違ない。

（1）大野　晋「基本語彙に関する二三の研究―日本の古典文学作品に於ける―」（『国語学』二四、昭31・3）。

（2）前掲の大野氏論文・第七表〈古典作品の品詞別語彙数とその相互比較一覧〉によれば、形容詞比率は、土佐日記六・六％、竹取物語六・九％、枕草子六・九％、源氏物語七・七％、紫式部日記八・一％、讃岐典侍日記六・五％であるが、安藝直子「『和泉式部日記』試論―形容詞・形容動詞を通して見た―」（『学習院大学国語国文学会誌』二四、昭56・2）によると、和泉式部日記では一〇・八％にのぼる高値を占めている。

（3）この日記には、自作・他作に関わらず「物語性」が認められているのは周知のことである。鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記改訂版』（昭58・10、至文堂）解説。

（4）本文は、遠藤嘉基校注・岩波古典大系本による。以下の引用例も同様である。

（5）「あかし」は、状態性形容詞と考えるのが普通であるが、ここでは「いと」という副詞が冠せられている。上代に於いて「イと」は、さうした動作・作用のありかた、また、一つの情態の過当であることを多少の主観的判断をまじえていふものであり、さらにこれの母音交替形である「イト」にいたっては、この主観的な面をさらにつよめて、ひとつの事態を強調ないし感動のニュアンスをそへて表現するにいたったものと考えられ、「平安時代以後の「いと」は、前述の「イと」に相当する意味のものもふくまれてはゐるが、しかしそのおほくは、むしろ「イト」の性格をつよくしたものであって、感動詞にちかい場合もある」と考えられている。（阪倉篤義『語構成の研究』昭41、角川書店）「あかし」は、「いと」が冠せられることにより、詠嘆に近い感動の表現、すなわち、情意に重点が置かれた表現と考えられるので、情意性形容詞の範疇に含めて考える。

（6）諸注釈書を見ると、玉井幸助・尾崎知光・遠藤嘉基・鈴木一雄・野村精一の諸氏が「地の文」説であるのに対し、五十嵐力・山岸徳平・藤岡忠美・清水文雄・小松登美の諸氏が「会話文」説である。

（7）遠藤嘉基「会話文か地の文か」（所収『新講和泉式部物語』昭37・9、塙書房）。

（8）鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記改訂版』（前掲）。

（9）小山敦子「「の」「が」「は」の使い分けについて―展成文法理論の日

本語への適用―」(『国語学』六六、昭41・9)。

(10) より一般的には、「情意性述語には、情意の主者が常に一人称「我」として意味的に潜んでいる」(川端善明「用言」、所収『岩波講座日本語文法Ⅰ』昭51・12、岩波書店)とされる。

(11) 上野英二「物語の言語行為―源氏のものがたり―」(『国語国文』五四巻八号、昭60・8)。

(12) 清水好子『源氏物語の文体と方法』(昭55、東京大学出版会)。

(13) 本文は、山岸徳平氏校注・岩波古典大系本による。

(14) 藤岡忠美校注・訳『日本古典文学全集 和泉式部日記』(昭46・6、小学館)頭注。

(15) 鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記改訂版』(前掲)。

(16) 平田喜信「和泉式部日記と続集日次詠歌群」(所収『和歌と中世文学』昭52・3、東京教育大学中世文学談話会)。

(栃木県立小山園芸高校教諭)